

子供の頃の足羽川河原よ、いま一度

荒川九兵衛

私の生まれは足羽川河畔の農村です。したがって河原は子供の頃の唯一の遊び場であって、そこに住む動物は親しい友達であり、植物は大切な遊具となっていました。この河原こそ私を育ててくれた懐かしい心のふるさとであります。

寒い北陸にも春一番が吹き込んで梅の花が満開になる頃は河底の高い足羽川の水は河原一ぱいに溢れて氾濫し、冬の気配を一掃してくれます。いよいよ河原は私達の広い広い運動場となります。

ツクシが枯草の根本から黒褐色の頭を出しかけると野原では一斉に枯草に火がかけられます。雪に閉じ込められた山村の雪も融けて、人々は福井に買物にでも出かけるのでしよう。三三五五野火の煙を避けながら堤防を往来する人々の姿が多くなって来ます。その頃になると私達は流木拾いに河原に出かけます。ネコヤナギが芽を吹き、ねこが脹らんで来る頃です。流木拾いが終わった私達は柳の枝を折り、腰に差したり、振りかざして見たりしながら河原中を駆けめぐりました。おもちゃのなかったその頃の私達にとっては柳の枝が鉄砲であり、剣であったのです。それに飽きると砂場に出て相撲をとったり、ノイバラの茎で足をひっかかれたりして、春のやわらかい日差しを一ぱいに受けて跳び廻ることが出来ました。

やがてネコヤナギの花も咲き、ツクシの胞子が風にとばされる頃ともなると河原は緑のじゆうたんでも敷き詰めたように若葉が萌え出して来ます。ヨモギ、スマレ、タンポポ、ハルノノグシ、スギナ、レンゲソウ、チガヤ等の若葉が一斉に背伸びを始めようとしています。摘草の人で賑わうのもこの頃です。摘草の間の手を休めて草原に寝転ぶとヨモギ、ヨメナ等の若草の強い香りが鼻をつきます。時にはこの香を嗅ぎながら寝込んでしまったこともあります。じっと若草を背にしていると、ぼっとかすんで空高くヒバリが舞上ってピーチク、ピーチクさえずり、急降下して来ます。ヒバリの降りた場所を見極めて、巣を探して見ますが中々見つからなかったものです。石原に出て見ると、カワラヨモギ、カワラマツバ、ススキ等の若葉の群があちこちに見られ、群の間の砂地では種々の草の芽がきれいな毛せんでも敷いたように一ぱいに発芽しており、川のよどみにはウグイ等の小魚が群をなして泳いでいるのを見かけます。この群を追った時の水が冷たかったことを今でもおぼえています。

スマレやレンゲソウの花も散り、マス網がすっかり取除かれる頃になるといよいよ初夏の訪れです。チガヤが一面に白い穂を風になびかせ、ツバメが飛びかうようになります。この光景も絵にしたいような風景です。カラスノエンドウ等の豆科植物にもさやができ始め、川の水がぬくみ水辺に出て小魚をすくう事もできます。この頃は水辺で笹舟を作って川の流れて競争させたり、草笛を作って皆で輪になり学校で習った唱歌を草笛に合わせて歌ったものです。カラスノエンドウの脹らんださやを探して豆笛を作ったのもこの頃です。

マツヨイグサの黄色の花が咲き初め、カモジグサ、ナギナタガヤ等の穂が風にそよぐ頃になると夏がやってきます。夏は至るところで蛇の姿を見かけます。もうこの頃になると草原では遊ぶこと

ができません。子供達は裸になって水泳ぎです。泳ぎ疲れると浅瀬をせき止めてアユやウグイ等の小魚を追い込んで捕ったり、石をめくってゴリ、ガム、アカザ等をとって見たり、遊び相手は水の中の動物に変わります。ネムの木の赤い花が緑の中にくっきりと浮び出るのもこの頃です。

ネムの花がすがって色があせて来ると土用で薬草取りがはじまります。ゲンノシヨウコやカワラケツメイを山程積んだ荷車が堤防の上を往き来するのも真夏の風物です。河原では牧草刈が始まります。河原は干草の山があちこちに見られるようになると河原はまた私達の遊び場にもどります。ウマオイがギーチョン、ギーチョン鳴いています。叢の中から大きな羽音を立ててキジが飛びたち私達をおどろかせます。石原にはセキレイがピヨン、ピヨンと長い尾を上下に動かしているのも見られます。イナゴ、バツタ、トノサマバツタ等の昆虫が沢山人の足音で飛び立ちます。この虫を追い廻して遊ぶのも中々面白かったものです。カワラナデシコやミヤコグサ、コマツナギ等の花も咲いています。真赤な夕やけを背に受けて家路にいそぐ頃、マツヨイグサの黄色な花が咲き乱れ、その向うに大きな丸い月が山の端から出て来る美しさは何とも言えないもので、今でも私の脳裏に焼きついています。

二百十日も過ぎて稲の穂がそろそろ色づいて来る頃になるとヒガンバナが緑の草の中から顔を出し、真赤な花を咲かせるともう秋です。ヨモギ、メドハギ、クズ、クコ等の花に交ってヨメナが清楚な花をつけるのもこの頃です。叢でキリギリス、クツワムシ、スズムシ、マツムシ等が秋の夜長を楽しむのも、もうすぐです。この頃は河原とも私達はしばらくお別れです。私達も稲刈りの手伝いに狩り出されます。

忙しい秋の収穫も終って河原に出て見ますともうすっかり一面スキの白い穂が晩秋の風になびいている頃です。あの緑色の野原は枯葉の世界に変わっています。その枯葉の中にヤマドリやキジの美しい姿を見かけたり、叢の中から急に飛び出して道をすばやく走りぬけるイタチの姿も見かけます。一列に並んだガンの群が賑かに通りすぎたり、カイツブリがせっせと水の中にもぐっては忙しそうに餌を求めています。時々、カモが飛んで来て水面で羽を休めています、急に物音に驚いて飛び立ったりするようになりますともう冬も真近かです。

いよいよ冬がやって来て雨の日も多く河原とはすっかり縁がなくなって来ますが、雪が降ると又河原は私達の子供の遊び場です。ソリを持ち出して堤防の上から滑り下りたり、竹をまげて作ったスキーで一日中楽しく遊び廻るのでした。

この河原も約50年の星霜を経た今日では昔の面影は殆ど見られません。砂利採取で川の流ればすっかり変わってしまい、河底は深くなり、子供の遊んでいる姿はどこにも見当りません。それもその筈です。河原はすっかり荒れ果てて、一面カナムグラ、クズ等の蔓草で覆われ、ヒメジオン、オオアレチノギク、オオアワダチソウ等の帰化植物がはびこり、蔓草の間からわがもの顔に伸び出して花をつけ、ヨモギやヨメナ、メドハギが小さくなって僅かな空間をわけてもらっています。ヤナギやネムノキ、アカメガンソウ、クサギは伸び放題に伸び、水辺のヤナギにはビニール等の空袋の白い花で飾られ、何とも言えない荒れ様です。又私達の親しい友達だった小魚、昆虫、小鳥等の数もめっきりと少なくなり、僅かに姿を見受けるだけで子供の頃の足羽川河原は今も想像も出来ません。ヒバリやバツタの類は死滅してしまったのか、彼等は一体どこに姿をかくしてしまったのでしょうか。すっかり河原は人々から見放されてしまっています。

子供の頃の足羽川河原よ、今一度よみがえってはくれないものか。私はどうしても子供の頃の足羽川河原を忘れることができません。

特	別
報	告

予見が適中した薬草展（一次展）

従来、わが館の展示で一番の不人気は植物部門であった。それでも秋にはきのこの展示に人だかりがあり、また、たった10点の薬用植物コーナーに人影が多いのを見て、興味と関心の所在を痛感するのだった。時あたかも漢方ブームとあって、今年度に予定されていた植物の特別展は薬草で、と考えたのま2月である。見事にその予見は当たった。会期中（10/6～11/9の35



好評を博した「飲んでみませんか」コーナー

日間)はどの日も、展示のひとつひとつに見入る多数の来館者の眼の熱っぽさに驚くほどだった。

当初、郷土の薬用植物は残らず採集しようと決意し、いろいろの文献をあさって、300種収集の目標を立てた。各種の採集適期を逸してはと、雪どけの4月早々からの採集である。特別展開始の10月6日ぎりぎりまで採集が続き目標を突破して320種に達した。会期中も続行してさらに20種を加えたが、まだ幾多取りこぼしがあることを残念に思っている。

収集は、薬用植物の基本標品だけではない。生薬標本も大量多種展示したい。それに目玉商品の「飲んでみませんか」の40日間をまかなう7種の生薬収集は並大抵でない。開幕前3ヶ月はしばしば土日返上して、かなりの量の展示生薬70余種も完成した。

特別展に先立つPR活動も大事な仕事である。6月には60余人を集めて、路傍の薬草を調べる会を博物館周辺で催し続いて館内で煎薬の接待と特別展予告で、大変な好評と期待感が醸し出された。8月からは館前に薬草の鉢植20余鉢を展示して、これを特別展開催のいきたポスターとし、来館者の目をひいた。地方紙が、ひたむきなわれわれの活動のいろいろを取材してくれたことも有難い威力あるPRとなった。

特別展のテーマは、「薬草を見直そう」であった。さらに次の小テーマを設定してコーナー別標題とした。